雲泽雜志

一

3862

柳里恭 鵝

○

伊勢の大納言の妹君を陽の冨士へ
協のいでゝを婢女に扇をそゝらんとすれどもとりはずすで
やゞて扇とゝりゝを妹君こゞめるひゝくやされるハそと紙
をゝくゝゝ人包ゝて庭へなゝちやゝづゝくまへゝ殺すづゝゝゝと
やされゝゝゝ婢女やけゝるハ協をそのまゝゝゝちおけバ数多の子
とやゝ伝ゝバこゝゝいづゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝとて
ハゝゝど知ゝの書あり狩ゝゝゝゝゝゝゝゝ
づゝゝずゝやされゝゝとぞ
夢窓国師の書ゝるゝ托ゝ人ゝ
ゝ生ゝんとおゝゝゝゝ

つかへば嘘ハ心をつかひてかしこけれども心気を労せり人ハ心気
だに労せざれバ命長きものなるべければとあり鉄拐仙人の讃に
仙人も不老長生ならば後なずおもしろからずまでなかなか生
ことあり
相州玉縄といふところハ荏柄平太が所領なり平太ハあやま
ちありし時北条時政のちからをかりて平太ハ縄をうけて諸
大名の中へ引出したるに和田義盛が一門なるをもつて九十三
騎一党将軍ニそむきて鎌倉をやきて是より玉縄の城に
没入して北条時政ふせぎあり乱後和田乃筆を惜ねらましに
朝比奈義秀一人のこりその行方をしらずといふ義秀も鎌
倉のこぶれより信濃の国へのがれて殖料の八代ゟに隠れ住て

木曽山にいり樵夫を業として身を終りしが権の臣悪者
が祖なりといへり
淀川にて鯉をとるに漁夫あまた中にいりて鯉とあらそひ居たく
揚へひこゝて浮く出るを抱鯉と云ときころよりのことか
是とぞ人を諫るの語も是に同じむかしハ善人もあしき
もの共にならびゐて恥よきところにて善におもむけれ
るを肝要たるべし人を异見するにも大かたの人ハその
者の非なることを挙て异見すればいよいよ容れざるものなり
これ人の功を挙て是を賞美しかかる功をなしながらい
でかかるよろしからざることをおもむくやよろづ信ずべき
人がなるをどくよろしからざるの志よりして今日まで

の大功を失ふ事その義たよ怠すべしとあるべおの也我慢せざる社人あれば是ぞ学らびその理よ伏すべし

○

寄語の二月末まく也ハ書作まて無未ある茶筅を
考り老若男女ある也をとりのへく袴ゑ右ゑ〜こゑてく久
里毎郡よあるくハ是をとりて茶をゑく煮をゆて有ゑをと
南郷の風あり今ゑこの茶筅たゑゑ有〜むり〜をゑふ
よ書作社茶筅無あるよ茶を立て老をやゑふとか
ら〜〜とや〜を今肘ハあるひゑゑとき器まく茶をて人
と労〜書と端る人ゑるゑ人ゑ社人と悪傷
あることゑ社如〜
人の礼節を能するとの侍法ハ言るきも紙〜きを万事

○

人口あることあり子石飯すゑ人あゑば九百石ゑ〜まゑふひ百
石ゑ年ゑふあま〜亜ゑ一家百姓ゑ社ゑ角ゑゑば九十
姓ゑて寄ゑひ十姓をあま〜むゑ〜ゑの他ゑよゑゑ倹約
ふあり社寄嬬よすべゑ〜倹ゑあ社べきを我〜てゑざるゑ
倹約あり寄ゑすべきをゑ社べ〜ゑく惜むゑ寄嬬あり倹約ハ家
をおこ〜寄嬬ハ家滅ゑ偽すゑ
本三位重衡平氏さゑうの氏冬月の打ゑゑ帝よ重扇の地
とゑ社ゑゑ時ゑゑぎ氏を一羽ゑきゑゑとおらせゑ也〜ま
あやまちて命を切ゑ重ゑふち屋のゑ残里ゑる〜言のあと仰あ
ま里ゑる射
さ月やゑゑ〜山のゑゑぎ氏姿を人ま又ゑることのゑゑ

とまれり又浮泉尉盛次子平氏没落の時重衡を追ひ
ゆひて旦馬一ツを持られたり後が馬を借せよとありけるを盛次い
なごろくも是れ敵ぞ我が身の時なり逃のびよと子ハ歩ニて是を
ありますん是ハ雨夜の傘なり借すまじとて走り行て
我へりこそある人かくり侍へり
石州なる僧のもとへ京の土産にとて香泉を贈る人ありけり
つゞしらずく湯をたぎらせなるうち客の来りたればよき折
からなりと土産にやげにめづらしき香泉をまゐらすとて茶
挽の中へ茶入の塩を加へ湯をそゝぎて箸もてかき交
へ出しければ客もこゝろ得ずまづ一口喫しぬるに甚くありて
飲ざれバ堪がたく湯をもて飲せたり僧ハ数

まあらくよく/\うち挽まゐらすべしとて子ヲ客辞退して久
しくこの客京へ来りし時茶がわしく此事をおぼえりぬ
四条にて香泉を飲まんすゝさる人もありけるにけれ
も麦芽をさいと麦する人はたゞひとやあれはじ笑き
長楽寺に環アといふ僧室法の火鉢を得て目に離さし
て物をかき袖に挟し昼夜をかさねたずある時ハ嬉
より茶をとる客来りて濃茶の馳走ありけるとききなく
あがなりすり倒子ただ二盃を所望なかなか心得く客
の喰を意得は火鉢へ火箸にて灰をなりつゝ吐みにすれば額
を環アかりそおしさへまたし待ちへ出て灰吹ありぬ
ハ是へ吐なつてえずず客ハ面白く喰を飲てくれにけり

やうにぬかるべし常は家ふかくとぢこもりまひまをしれまゝに
ふかまりくおもてをかざる不礼やうにおもはれとゝのひ茶の
湯を仕ものとをかゝふまあるべきうるとをを常ふせざるやうふこ
そ尽はたくゝるかりと環了をおがみ平二五をきて額
をおさへるがよきやおきへざるがよきやこゝろひめ
むかし金ふ豪家乃高人あり囲碁を好こゝろこの尽
をゝくゝ世をゝゝれるものの多くふくより入来りる中ふ江ふ
ふくゝ諸侯より人をる何某人の後より来る呼出を去
て堺より専仕師と称り多くの弟子と集ゝ世渡りと
やゝゝおくゝ仕家ふ来りて囲碁のおもをゝ取りるまふ
附主人を碁をゝゝ居りるまふ家仕支配する者金五拾

両紙より色ゝゝ借をより来りゝ貸金の利金かりをゝ主人
渡しぬあるゝ碁囲碁より人をゝ居ゝゝがるまゝ
あとふて渡むゝゝをゝ碁打をゝおまふ久ゝりる浮ゝ乃金
のをゝを兼び支配人の中出りるふ主ふ文ふたゝ主ふかゝと云
ふ支配する者をゝゝたりゝとあるゝゝ金丸形方
丸りまゝ丸つゝゝ考る拵来りゝまでいかゝゝの人おゝ乃えあまゝ
法れゝゝを手ふれらゝまゝ丸つゝくゝひてゝゝ丸爭ひいよく止
まゝゝまの考まるの時外まゝ来るものゝゝゝ形ゝ居あゝた
るふ手智の師ゝる拵何乗のゝかり彼人中ゝまゝ金かゝふ
目の前ゝきゝ人まふあゝゝれゝる人ふゝ丸時の貧困まゝ上まゝて重
志おゝゝ変ずまゝ紀をまいひゝゝゝゝゝ終まゝせまりて揉めま

じと極めてもいひがゝりとなつて支配のことを云ふ人ハ
ハなゝく何素あるべしあのあるべきまに人あらず探ぬる
あるべしとハ扨〳〵ふ式こ足付るべしとく序ぶ〳〵く所
のものとふ行きくこ五こうれあがる法つぐまこ云出ふやうまこ
世ぞ雪降まへこ要とあ多る時ハれるこぞくの金をこ
のくさたゝまこ五こうぶ足ふ涙ぬをとと粧ひあねるまハあう
ねどこれとり雪庫へ行たる者をなく問らせまふ行とあくか
こなりひまこりや何ぞ元ちづへあるく持ゝまこことやすふ
かとんやすきふ住せく暮付るれりとのへぞ何素あづし歩うさ
ぶきくこやうきれぞこそあ五流浪の船乃さるふさるの日乃
ふうづるたくぜくく多くの金子目元付て人あくぶ持う

了ぬあれこの車沙法〳〵ふまづ扨あけるぞるの金こそ
のくくゝ〳〵ナ屋〳〵ゝ稽〳〵祐ふれう〳〵ふまま支配の者
家まこて主人へくこと告たり是ぞ扨こそくく舌を巻
ぬこれより十日あゆりを経く金五接委我持来り使て主人
ふるくく和家ま伺りひとりの女子を法れくいづこもあく
失ふゝ留家ハおよりつゝ人ハ足ふよくざることのありとくく
爪ぞぶき去て傍五りさあるまるの年も養形こゝ煙拂する
打〳〵も産〳〵きのあげ〳〵より及古まつこゝる金五接委とう
ち長せりこゝ〳〵ふいりまと打あまく改め足ふふるゝ〳〵ゝ人
ま貸こる利の金あくく重の所とくぶひこゝ肘の金子り
是ハ五ま家と家とと又会せくゝ得ぬこあつまり決合す

まで、もこの所に行くへもしらず知ぬ者されば是あくまのあるべきなりかくて五七年を過すうちに東国より小刀商人の類を仕る小者なる尾張の国乃商人あり堺の問屋ゟ又也あく物ゟ買入こゝの地より手分しの所を業にして諸国所々の業あるべきの業あくそれハ五七年あとのことなり

ありやと問てゞ家あるべの業なくそれハ五七年あとのことなり

して流浪の体をしを商家所々の業ゟ金五拾両を盗

く何の変ことも分く失ふ人数ハ云尾州のあき人数より

ちやく百姓よりこの金を所ゟ盗ものハあるべ他の人ハ盗て

こゝ有り居れこゝ其所の姫ハあひくゝ多くのよしを

変ようと思ゞ問屋の娘ハ何変なく変なのふゞと云ふ是二系

あく商の者ゟ強ゝ商系ハいろ〳〵小江口といる方夫を呼

ゝ二年をつゞて上れゝゞ形ゝゞの江口ハ其所ゟ

姫ゟてこの所商家へ返すべき金の左衛門ゟ夢ゝ

と云ふ方あゝゞ人の雑ゝ有ゝ所ゟ時ハあゝべきゝ宮あゝ像

世ゟくいとゝ考ゝ考ゝと語りゝゝ世ゟ豪家の家の

支配する者ゟ其問屋ゟ方ゟ変ゟ主人ゟのよしを告ゝ

に主人変くゟ方ハ呼びくゝ支配乃者を招くやうこの才

いふもして京ゟのゞ番系ゟ江口といる方夫ゟ才夫

ゝすゞ方ゝまゞ拙討ゟ形へを弱ねやき所ゟ変ひて

ゟ形屠ざるゝよくゞゝ呼びくゝ呼ゝ屋ゝくゝ多くの金を拾

ゝ江口ゟ人最ね形ゝゝ父ゟ那村いこゝ所ゟ

ゝ其やうゝ求めて人の小他ゝく活計とやりくゝ法

みちゝめて日ゝよ支邪の者よろこび那村ふるり暮るふい
とゝびゝき家あり人の居ざるにあらの者ゝえば所ふ
出くとゝびゝ金さくゝひみぐ彩なへくさくさ表つ所ゝ潮戒
拾て立居ものはるををよてゝ居ぐゝと日ゝ不所かをゝの有さ
お存ゝ寄ゝろうてゝまてもゝ所れざゝしぐよくゝにたぐひも
あゝれバゝぐゝのゝをかうて主人がいゝゝ羽を述くゝその用ゝ
めみゝず八まどあゝのまゝ仰せハざゝやと云ゝ猪狩ゝまゝ人
の獣ん公羽をて解く屠きとあゝず家ゝく獣を交ゝるゝ人
ハいゝゝどのゝとゝゝゝゝゝ許容あゝべきとれきハ人儀かゝそ
此時の獣ん猪まゝ知ゝべきと明の金ゝでも書ゝをいゝゝまゝも
せんすべあゝ金ゝひゝの姫をゝゝく潤達ゝたり士ハ不義の

拾とゝけず況や金銭ゝ拾ゝおやゝの方ゝれハ金くゝ
次べゝゝゝやゝ書ゝ屋ゝゝ耳ゝ久ゝも申ず書て畑
を潮ゝゝれ者代さぐゝよゝびて金を戻さんとすまで
を交ず書くゝのとといゝゝれ牙の方のさゝゝとある
屋ゝゝゝけゝゝを追ゝ金ゝれハ是非くひと先家ゝ傾ゝ
書言屋何業ゝふを拾ゝくさゝゝ他ゝゝ業ゝも姫ゝ
永交も彼ゝめきいゝゝゝき者ゝゝ此事ゝ由ゝゝゝとゝゝ安
入れず五ゝつゝ五拾金ゝゝゝれず生涯那村ハ老我
書ひゝく終ゝゝゝゝゝ

○

子をゝゝゝゝ親ゝゝゝゝとゝゝゝ奥ゝの秀郷ゝ男子五人
あゝ兄孫戸太郎ハ者ゝよきゝゝと好ゝて山野と乗とと

勢めこの頃の冠者を女子と友だちく接ぶをとりたてこの
伊達は沙弥ハ山川の漁猟を好こて他のことをば衆の三郎
を武具を好こくよきあるを射ハをとめ求りくこづくく
試こ刀剣ども低抱ハ人をと講りあくこくよくくこぎるふ
くづき折てハ捨こうとこそ何ぞ文学の道をふくハすふよ
こを嫌ひくこ只他の業はこと事とくこ衆ばりハ拙を日よつぎく
て久学の道をうりてつとめくこ射秀衡ハ子どものこころ
げくとあくこ又ん云くく然の未つこく金岳山つこくと体ひ山上
小庵をまくけて山河乃風系を眺ぬすこうくこ子どもをあ
つめてやくこ何れも色形あるこの山乃屋上ひと木乃梅
あくをさくこ云ん云くく岳の煙慢ちくこ雪あく

ぬくこくの日ふるさそくこ又やらんやとやくこふおのくこ近あく
又こ系ぐくつこ又くいくふるも父が仰の如くさくこ岳をさくく
こ又くて去くこうくこくこ伝るかくこいふよ衆ばやハ碧
かくあつまでも掲岳乃又ばくこ又も父のくこくふいくこうて仰
ま遊ひ又系くこ伝までこぐ眼ふ岳らくきあれかも又こ伝く
ずくくこうち達くくこくこ秀衡ん云ふふふハ岳をきとあくこ
いくくも彼らぐ志と又ん人こくのてぐくかくまふハくこ子実ハ
なき岳と系ふ伝くひてあくこくこも衆ばくこも岳きく岳
ふくこ子くとくこくこ勇ハ孫戸すぐれこ達でこ弱ふくこあく
元こハ系弱かく伊達ハ義あくこ仏く勇れく衆も勇ふく
こくこも義行のまくいくこの頃九郎義経奥ハ小来くて秀

衡をたのミ居けるころ鎌倉より討手下向の時秀衡病氣にかゝり
に遺言して義經を蝦夷へおとし義名を後世にとゞめしと
ぞいひ傳へたり
予が友としける平済何某といふ者は咽息づよき人にしてあ
る時主用ありて人多くせはしく行かふ家のかどにて二階
より虫をつまみ吐たる唾のあやまちて平済が着せし
上下へかゝりたるに彼の供人大いにいきどふりその家に入
唾を吐かけたる者を引出さんといへど平済止めてあやしこの家を
なるべしとその家に入て挾箱より着がへ上下をとりおし
て着かへけるにその家のあるじ大勢出て平済に
かゝるあやまちなるべし重ね〳〵御とがめなく出行ぬ供

人いひけるはいかなれば其まゝにゆるし置きたるぞといふは大切
なる主用なりしかるにいさかひせば主人のため也 常に
ちかしき堪忍は此のみなりといふその後ま主用ありてその供
人を引連出けるに折しも夜の事なりし溝のかけはしを打けるに
平済が袴のすそよごれ下をけがしければ供人大にいきどふり
已に打擲にも及ばんとせしをおしとゞめて行ければ供人申し
けるはいかなる事にや左には用ある時は私用
ならばおのが人を罵りする者の本意に違へりたゞ
堪忍が世に秘訣といふにあるべしとぞいはれしとぞ
伊豆駿河は海邊にて魚の海上にあつまり寄る時は浦の
者共一齊に声をあげて浪を打よするをナブラともナグラともいふ

これより漁夫の詞なり熊野にてもニヨナブラといへり文字に
かゝば潮魚群の義なりナブラハ魚群なまナブラといふ詞と同じ
凄じといふ風も来るころハ風地を吹きめぐり土埃を吹き巻
き或ハ長閑なる日などにやと風いで渦を巻あがる辻風なるべ
しまた西光才子風瘙といふものかゝる人の孔へをさがす形り
るぐ時に傍むこともなし惣ぎろくして破血しるくその傷痕がさしこ
のことをかぞへもて古き暦を見るところにして居るときハそれ立よ
ひなしところの者ハ中待りぬ
六惑とて惑むべきもの六ツあり其の詞に今称へ言ぶるなど惑
きハなく書を見ばしるく知識するなど惑きかれく人に物を
やまて奥にきせるなど惑きいやなく各きなど惑まぬなく欲かりき

など惑きもちなく人をそねむなど惑きに形し
紀州に豪家なる農家あり田植の日さをとめ凡二百五十
人あまりもいづるに其の日は朝田植もしまるところ俄に山中に
て大いなる鷲乃なとあるこびさるが終に大然つかえく虚空
へとびあがりさるを彼より一人うけ来りて田植の辺に並びたる
まへあまりを見んるれよ鷲の大をとりて雲に翔り往ぬらくへすだ其の
時詞を見ざめつくさるといふ度ごとに沢ら苗乃植えじめ終り
高人なのゝを知らバこ子大さるを仰ぎ見るべし其ある時
かこれ苗二百五十束などのおこて事終りごとく人には語らざ
まじと思ん何とよく見も物のまくる人をうる人なげハあり
たまくことふところ

洛の七条に浄味ちく豫といふ塗師ありて蒔絵をよくしえて多
くの人を仕ひけるころ伏見にて人がをよくするものあまたく
ある時浄味を見ていひけるハ汝今ハ何ひとつ不足なけれども
五年家を離く後にハなるべからず乞食にもなるべきなどのあ
し紀おあり浮しこるまへといふなりて浄味本に問けるに人
おハ志りとしるる書にも出待るとぞやといへるに平管ていふ
人相の書くわしく阿りてその理りなくらんあるを聊りむかし
井ちの永徳修正乃安倍の泰親に問たるやうのことに叙
羅のおありやといふれしに泰親ハ思くありと云修正いひて
あることを知れるやといふましし時泰親おこひさくありてその事を
叙羅などやるけれあるましき形身をめてあるにると思わあ

るとく刹その相乃ある徴ありといひしが果して木曽義仲都
へ乱入の時法住寺にて楯の六郎が流矢に当りてうせなりされ
ばかとくも人相を見せられしこころ刹乞食の相をまうけ
出したる事にして果してまていふに浄味の所をありて身乃
おやうによるべし相銭果すまでハその言をなげるをなりて
て陥りぬそれより浄味ハ四十五六のころしよりしくおひしより
らぬことどもありてそれ身つひに零落し世にまで八年が事にと
るて清水坂に乞食となりたるを見し人ありとうはまぬ
浄味ちく豫も阿弥陀堂といふ塗をはじめて筆せし塗師
の上手なりしき
木曽比山中など深山幽谷をくるく岩茸をとるにハ籠といふものを

遣りて繦を結けるく夫ハ忍れよゞりてその妻抱この枝より下
てつりおろし引上げゞ〳〵谷間の岩草をとぬとぞ下ハ
幾丈ともなく知まざるところなるよ〳〵只一人のがれるも
しあやまちなく繦のきれて落こんかを命かゝゞ又伊勢
乃浦ふく海士の地獄をも乳のこ子かんど引法れて夫ハひ
をつひあく命もやひするふ妻ハ海底ゟ飛入こゝ二見と
ことなるうちふ子ハ乳を吸ねくよく泣声の海底ゟ出る
みぞを一つ泣まく抱へどこの子の泣こゑ乃出るゟひろされ浮びいで
命ぞうゟ立つき息も泣きあんずるふ乳をとるあるさゑ哀
ふ〳〵実ゟ物語の人を農動すゞ〳〵世ゟ業さまゞ〳〵ある
中ゟうるゝをひする業も有るものを家ゟありくその日を乏

○

ふゝ〳〵つゝ命をいとありがきことゟあるゞや
江戸下谷高岩ゟといふふいつの泣ふる茅子乃俗二人あり〳〵ゞ
一人ハ武相待義ふて常〳〵ちの為とをかゞきとのこふんとつく
せど一人乃俗を戒形をもたとゝゞ大酒を好こいさゝひかゞし
てゟつ私多〳〵しゞある時什物をこれ出〳〵妻ゟを一人乃
俗ゟく涙残加へれゞも少入ざゝ乃金ゞ妻ゟを抱ゟつゞ
ゟの俗追出〳〵ゟゞふちの為ゟをゞくゞくいふゟ抱ハ
ひと先渝乃ゞ〳〵きゞ〳〵く戒こるゟふく抱こ金ぬゟ
ある時俗乃を法ものして妻たゟを少て一人の俗又抱ゞ評ゟ
形て悪俗ゟの友ハ仏ゟを盗〳〵ゞ妻ゟこを引ゟ涙ゟ
こゝく更ゟ乳ゟふゟ寺〳〵住抱ゟすゞ金ゟ人ゞゞひゟ及ゞゞと

主はやく〳〵渦のちまはりてあびて身をかくしたとおもふまに、おりてうしと
〳〵彼主を追ひ〳〵なれすハるれよりなをのがるべしといふまに伝右
衛門をうべさわるハ彩ひのおくふるの舟よりとまをつかはすべ
悪傷ハ今者ぶ〳〵ちがかこハるよ急〳〵おひ〳〵瑜す魚きこのふよ
この傷夫ふ伝右をうとこ家ふとをもそ悪傷を追ひ〳〵た
まひんこ和のふをのくるるまを)をくりて羅形き家ふいとまなる
こをころ体怙のふまあるずやといそ伝右人〳〵さそある
す四月ハ今ちがるを出ることをいづこ行くもたや傷一人の勅
ハるるれ分り悪傷ハ今ちがる傷をそるれ外ぞ忽捕まる羅人と
ならんもちろ〳〵雖〳〵さすれバちがほもすくるく一人の弟子を失ふ
形りも名ふ今暫〳〵ハくふおきく〳〵彼が命をも延〳〵ろハ厳

く義誠をもそび善ふよ立るとをあるべ〳〵るまをたの〳〵
こにちがを傷をそるつの我ぞるれ分りとのぞ此より〳〵を四て悪
傷も呼の言恩ふ感じやく〳〵善ふよひるべ〳〵くぞ
ひろれ賀を車ふ裁て十三歳の子どおぞ〳〵きび猥を肩
ふけく〳〵曳き賀が妻とおりふ女の幼子を背負ひ山七来る
るつのふを引くろ乃ふ食をぬるを又〳〵ある人よふ〳〵り
ろハく〳〵乞食れ今際ろ)をくの子を寄け引法ろくよ
ろうすることん才子をきを礼あるべ〳〵と笑ふ予おりく
くきふさ家〳〵の州乃嘉うセるうる法るいろ〳〵あるまでよふある
人の親子兄弟夫婦の中よ〳〵〳〵あるて面ふを〳〵ふ〳〵
て伝居すろ茅ふくべてるたとひ乞食〳〵て形くとも五ふ

むつまじく此食ぐ妻あるときの有り様ふ事 哉
ひとりの子ハ孝子有り子と貧し 書ハ点姦をといふべしとの
ぜうの人笑をとゞめぬ
京都 国栗乃辻ゑ島の婆と呉名をよぶる者あり老ぶめや
ゞ乳き丈の局ゆゑやぶれ人〳〵あり乞ぶ合情ゆぎうも子
くて動めのうちまゑぶくれ者金をとゝくハへ局多まうて
好見の魚商ゆく〳〵あり乞る父ハ下居く見とすゆゑいひ
ゑ野だうのふ刃とゆゑく魚ゑ蔵ひあうんよりも
新〳〵人たる美金を貸〳〵日く大刃と拾あんことをもゆる
ぶ〳〵ゆゑ〳〵をあまこれ金をとゝこう〳〵ひねもす
雪の妻きもとゞ扶ハ三時のあうまぶゑ〳〵まあり

き多ゑ貧たるをぶ朝おぶきハ行〳〵ハやぶゑ貪欲非乃の行
すゑ〳〵ぶ人〳〵呉ふあぶ名〳〵〳〵烏婆と呼ゑ乃乃あうハ拾られ
ゑうゑ子を貰ひゑう〳〵ゑ乃ゑて妻ゑ育ゑ〳〵ゑうゑゑいうねと貪ゑ
このゑをゆぶゑ乃法れハいつとふゑ子〳〵ゑ人あうて子樊波めゑも
あぶ名やゑ〳〵ゑあゑ時女子の拾子をゑゑひ懐ゑ〳〵ゑ家ゑ久
ゑふゑの子ハ美見いゑんゑゑく明ゑれ老婆と笑樊ゑゑあ
ごけかき情愛ゑひゑゑれゑゑ形ゑの悪老婆ゑも嬰児ゑ法
妙の艶態ゑ人外ハ廣ゑを奪ハ主飢ゑを殺すゑき乃悪意
を忘乃〳〵〳〵おゑゑ法ねゑりゑゑゑ食汁をすゑゑむゑゑ〳〵時ハ拾
ゑすゑ〳〵法〳〵〳〵已ゑ孤ゑあゑゑたのゑて乳け乃書ひゑ
痴ゑ自ゑねゑ〳〵〳〵法主ゑゑゑゑ〳〵〳〵ゑゑ

烏が雛を育てしと人もうらやむ女児とハなりけりすべて児女子
のおとなびつるにて痴情ひとさびありて雲態次第にありぬべき
艶情好ミ容姿をつくろふに至るものしや深くなん老婆めも
児の愛着に溺れ這ひまつはるゝまゝにおもしろくすゝりて交ふ
慰さみなれバ猶と好ミける折しもありけく形乃粧ひを志づし云
ますく傑らし見渡る附しくもあまたハ猿若のこゝろを刹那にして
十年あまりを経るほどに容色好婿らしく顔だちまのごとく
その艶麗なる世に絶倫の美女となりしが根に慈悲を懐
しくてくれる女が娼を嫌し忽ち悪念をやぶりて養育し為る
丹誠に慢じ弥志らぬものゝ妻とせんより妓女にも成して身が
身の楽しミ雅になさばやと舞曲乃妓芸をまなばするハせん心

を玉野とよびて遊里にいでゝ諸客の坐興をとるにこゝろ入
させけりて寵するにひまなく老婆めもおもひしがごとく子とハ
ものともおもはぬむりしおもして玉野が衾を臥にのみ志むけ衣
裳の錦にも表おもてを華美につくろひ裏にハ赤貧の麻
衣を隠して衣のまゝの舞曲も賤うくして人のおくに重ねさせ
を観たりけれバ他ひとの料めを防ぐに絶て養母がやぶさかり
なるもいまで養育せしまゝし姑息をうやまひ身ハ捨られし親
とも然なく独おのれが不法を怖て轉惑に伐るゝ志のもとも
老の力れ手弱をうけき不義に陥る多くの事にハ衣の帯も志り
つゝ耕ひ出て母の淡然と応怪しなく薪水の労にくらし
洒掃れつとめ寝食の窮迫次頼沛背くことなく孝情の

玉れるぞよ感ずるあまりのあまりの嘉賞の商人玉殿が美麗あるを立てくるぞ常ま立入る者人一倫のたあ玉殿ま教令を掛くる屋ひ搗上へ誘ひ行きく様せんとするま玉殿ゆえの教ハらくいまこて逢あふとをやるさねばいろかるあるぞと一百をぐるくんのるどとあれぐらふ易ねこるふま玉殿ゆ孫をこらろげあるひゆ裳とのさげ紀著をさぐるせつる野る狩あるのつぐまことまとつぶ弟紐ときくく副臥せんハ客ふ書嘉乃情をこと、くくあひるる紀らひハ兵ふるるハぐうへのこふあくず親をくくく人まあふぐるあるひるの愛ふ恨ねぞ明く衣彼をあくさみてて又乃あふせとねぎつ面くくるま玉ぐま母の命を待のこと秩ふ浪をはくくてるれバ商家のあるぐも感まこえるねそれ色たひふ紙

ゞれきくを書くくくその教ハ客をすげかくくく明ての契を約すまこごを客ハるげよりゞ付つれバさきふふくるるかくくひ居をれくくをんを含くく財を含くくたゞるくくとのこ教ひとゆるるまぐあくくるる日の夕持へゆ約をくゞつくく恨者ま下紐くくく辻ふ忍ぞせ玉殿を殺せくくはくゞふ高家のあるゞも害せんとくくるま玉殿ハるまこまをくゞるる乃ま下ぞ高家れあるゞと烏滸めの教強くくく居るるを二人乃者残殺害くくく何ぞるかくく失くる玉殿ハ怨歌ま肯ゞくく歌の浪華まのゞれくくと実京都戎きくくてるくこふ潛くくもゆ美麗乃面を焦くく魂き尼ま容をくくくくの志のゞくくまゞゞくくて二年経ざる秋のまま玉殿とゞゞを乃美我送まくくくを結母のくくくを浪華ふ教ひ歌のくくを

屋より色こけ都より人うく母乃嫁菱より手向け供書しけるこゝやゝ烏ゞ墨と土人も涙ぐで実ハ妓女玉琴を奏うし路

とゝうう

○

あるまの一宮北社司より化石して羊の方夫とつるあり妾数乃子を数とゝひ浮書の子を持くいう羊の方夫老さうゞ年七十を超たれども いうあるゝ貧やあり乃ん数ハ三十の家を絶めれど書とも迎へゞ家督を譲らゞくあつけうゞ方夫ゞ性質陸弱ゆゝて仕ゆうゝ神のめれいそねば進退已ゞまふゝてんむうざうをうゝゝゝ社既小治る動をせぎれば親と乃子らふ子乃書ふく数も家より書乃ゝる宮ハあれども囲碁すゞうのかぐさゝより独ゝ孫より進女ゞ色ふ却ゞまゝく財宝数多蓄ゝつ

まゞハ父乃不奥と歎ゝく妾ゞ妾ゞ乃ゝ家を陪ゝゝ父を病乃床ふうち臥ゝ死を待ゝうゝ更と人づゝくよきてもとびくくうゝんとゝふ志ゝゝゝゝゝ家督を寸の持ふ譲りて幾ゞゝゝ乃ゝ乃ゝゝゝ数ハ妾乃伯父とうゝひ家督をゆゝる往書を偽飛ゝ庭より許出れゞ官今二人の兄寸をゝて社職の乃動を問より持ゞこゝ入添切ふゝて数ゞ若叫うゝゝねゞゝゝゝを寸護すゝ職ふ疎ゝと数ハ家を退ゝ寸持より家督ハ宮ゝゝゝ侍書つゝゝゝもとふゝを侍人ゝゝゝて要ゝを企ゝ事成ず退ゝゝいふこゝ然ハ生涯より子ゝて仇とゝさゝむゝを報ゝゝこのゝ仏ふあゝゝゝゝゝゝ人の世よゝゝ暫ゝゝ乃ゝゝゝゝゝ持ゝゝゝゝを招てゝゝふよ持

云ふのごろ詩礼墓筆の業をよくさつくたの事母よろこ
ひくく身を退まんとをもひんと母乃人をまこころねてわこころあ
れと結ふふちやくもんづけのなつぐ仰よ考ぐひまあるうす
づ〜見れ墓筆乃業をおもひのお筆よ数の子をうあるも先ふ
産れ〜筆をこころく好よ産まて〜筆れ子のろの紀けと欲
とれ〜先祖を遠つぎることと歳数だふもおのぼろ乃あり
父の業言を背ふ祖れど兄弟る人を退く家督れ社職と副
うこも悔たるろまうかねば歳数おぐるおよぶとあ〜家禽
歳よもろぎる身うて神よ事るとゆぐを神慮いぐぐう納
文〜のふとを思ひんやいぎ通世〜考ぐぐ〜とて兄の勢
ふ家督をかづ母のふる郷へ系居〜て孝養考居〜考りとあん

○

節後場よあるづるころ沈殿の山ごえふ幸蹄の松見んと言野
村ある茶吉よ然ふまこの里れ名産さく鰻既をまこまく家
ど小鬱ふりはふとて考ひるこ考考考考十歳ナ考〜ふるやは色
たる兄の面ざ〜ひくハいと気立ま乃ひるぐかこふよ来く見
居られば見を分ちくあふ人ふるふてるのまく含〜我家ある
ぐの声あふげあぐ戴きてハ合考ぎるそいぐけくとゆぐを
終まるれまく指考ぬるやくのさろう鄙の育左もあうぬぐきをふ
やとおりくどるの面さ〜のあまよ気立く見えれば見ハ出分こ
ちの産れ子ふやよきを子を指られ〜を知りとふよいふとよふふ
〜て結れごる彼ハきるおん方よりあ形りおるのありとふあよぞ
ぐまや氏より育ふ〜くろる考人の子ろもるの傳乃弟

是ゞおのづゝからのやしきまうつゝ人ハそれぞれの縁を交
性ゝ育てる土地ゝ此気質と天地を左あゝしむるとも此情
の学未ざゝ移ゝうゝまゝ類を変ふる自然ありくいたんや善子
る性と倚ゝ人の際に接ゝおや童ハ百年を接ゝ善
ゝ子ゝく悪と家ゝく幼き時ゝおゞをゝゝを子を終るまゝく忘ざる
と七情の子ゝ支ふることゝ外ゝ年家の人一ゝれバ形ゝ左あまゝゞ
先人を伝ゝゝてゝゞめゝ善を教ゝゞゝ二五ゝ以ゝる一話わ
是江戸ゝ諸侯ゝ集とゝふ人あゝ年ゝ母ゝゝ乃縁ゝゝゝ豪富の
米問屋ゝゝゝある年伊勢参ゝ家のゝゝさゝ童ゝ佐賀の
中山ゝ休ゝひゝゝゝの名物餅の餅を食ゝ府多ゝの児らあ
つまゝて羨ゝげゝ又ゝゝゝゝ残ゝの餅を児らゝ今ちゝゝゝ

たれぞ十案ゞゝ此童ひゝゝハ支ゝゝ児らとゝすゝゝけゝく
庶凡ゝゝてゝゞゝゝゝゝゝゝ人乃あゝゝゝ合ゝゝゝゝゝゝゝ
らひゝく合ふべきやゝゝゝゝゝゝゝゝ子ゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝふゝ負ゝゝゝ子を背ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の孫ゝゝゝ形ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
き児を負ゝゝゝ童ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

バあられこ書へ彼くぬとつふよ諸嶋志きろふ初〜多といバを
まとそ彼が妻ひあ〜めと母と見ふ告ゆれバよろあび来〜く
三年ともよ年公のヲねぎつまバこそよ三度契約して中山まて
始〜考ふれバ名を中吉と改め呂仕ふよ十年の勤免私
あ〜すべ〜主人の船とあげ孫るとあぞ〜あれぞ法ひまろう
ろさ〜ふハ迷惑言耳よさろふのあ〜いた〜ハ不奥をけ二十の
年ヲ多と延きねもごろよやり方を教めてあぞ〜ゆゑど考君
久〜野小バ諸嶋のこふろぎろ次紛葉迷ぞ奢れろあ〜ひ呂れ
よ倹とせるとすれどとおのづ〜めるんの乃つぐきて家さ人人
ふうち住セ妾宅を学こ庫園の級り富人よ超るて拙木糸
石よ万猛の妻金と夢〜茶屋踊の接與よふろて家よ家

人よ礼と落〜〜漫ヲふ婚奔のことと〜すヲ妻ハ関脚の戒
を失ひ密夫ことをよ何ごへ奔ヲ者ものとを長よろこだ
ヲ二十こ分貪り抹却ろとを争ひ内ふ々家を保つ乃助けをう〜
ゆひ外よハ産残傾〜ろれ借財多ろ久ハ大厦のたろ〜ハ
一木のよ〜さ〜めるふよあ〜ざれバ名よ却ふ豪冨の家ヲでもつ
ひよ対家と分散〜〜あるべを逆井といろ斤田金ふ潜こ陸
ヲ一指つ〜へたろ調家のこ〜ひをろり代と〜〜つ〜も云とセ
ぞろを送ヲろうち子ハ生残書ハさるふ労れ但家ヲ明著の
ろ〜〜きよ壊ヲ〜疲ふをろされ病乗ろ〜死を結ぞろとハ〜ど
を対ふ人たふもあ〜ざろ〜〜ご彼中吉ハ心〜〜孝引の業をろひ
ろ〜〜ろ家のやうを付よ主人の病あろ〜と安〜よろ〜こふ

逆井の里ふ起きしひく看病乃法くめとねがふよ不奥我也
るされ介抱すまどもその日をおくるるはひごろあるれぞ昼ハ野
菜を商ひろく飲食の資いるるく教を導引をとくして主人が
業の利ふ翌へ食ハ抱床を添くめく炎熱をありごけ冬を
机よあるごをのくめ身ハ藜麦の羹粥を嘗めくよりく紀魚
の美味ですめ陳忠をくずらいふとなるるとバ諸時おひく快才
よおよび起居もつねよ麦ちねバある射中吉主人よもひ亲全
五番をこいでこ要もひとつ乃ゑいを伝れバあるくのいと毋なるる
でこれより浪華ふ起くこ主人の家を再興すでく大利ハ射を得
てうでく芸をえとくこのあくるよ小商くろ結ま へ亲全ハおの
ま理を孩きくこ主家の支配を勤くる二人とすくく偽りつれバ

とくよいて家ものべきとて後あがるふ家ふよそ主人も感激を
とめるね路資をかつふ更ずくろ格行よ紺ハ財あり予（ろ）
しく浪よ翌ひおがえく浮引の業ころるまとよ接遇の資ふれ
とていと安くく浪華ふおもはきおるがきこぎふたよりを得
ろ業番番ふ細細すくち箕箒の石くくろぎを）バ番家
のあるがよをくまれてこのよ洋よおがろれバ主家を起
すの忠節ふれバをくかと合せてねさせんとのるるよより諸時
我浪華へ却へ主人ことよりの中吉が忠功をあくハさんと
て□の内ふ申と右くくこを家の下くくを浪華ふと
ここくへくとぞ
江戸吳巖番諸時庄右ゑがくつひ中吉ハ主家佐衛の中

山ゐる農夫勧助が子ゐるその忠節おそれ泥す話説の如
く中吉三郎兼無のあり浪華ゐ赴く時秋よ入て為ゑ貧し
ひろゑ一ゐの物語を述るゑ育観音の堂ゐ参ひ孝引乃
業を孫の資として三郎のたゐふを兼び起やりその打う
ら社奇ゐりゑく彼地の兼ゐ来ゐ有ども祇ゐ一業ゐ
とを為ることのもゐくゐ一ゐ予が江戸よ有迄くころゐひ此
事とゆつゑく蕃を討い君ゐ不意賜とゐる当ゐ居の偽
ゐの奇を閑祀ゐゑ少せゑる感激ときゐくて書とゐつ
世ゑ出ゐを又とハ栽ゐ子兼ゐの命ゐりゑ依乃中山
ゐの虐主の目ゐる物が昇仙橋乃拒ゑ歌ゐゑ独ゐるのゑ兼ゐ
兼ゑずんをゑび此稿を巡らゐと書ゐふおの三が世の志

ゐゑいたゐ自銘の物ゐり中吉が忠節の奇ゐ拒ゑ忠節のたゐふ
ゐゑゑ拒ゑる辞藻乃言西彩の古奇ゑすゑり調巡去ゐゑゐとい
ゐを諸を兼すのおこゐひふおいゑを如が及ことゑゑあら
ゐ諸跨ひゑ三郎女ゐりゑるを中吉ふめあいゑく兼号を譲
ゑ三庁三郎と称ゑり

○

兼が文ゑりゑ人の子ゑ兄弟常ゑ争ふのあり兄を砂糖を
浪世ゑゑ衣食ふおごりて懶ゑ法ゑ兼貧ゑゑ為ゑまうけ
れゑ来ハ塩とあきゐひて廉食廉彼ゑゑ為らざれ兼家ゐ
ゑゑ不足ゑゑゑる社兄常に才が多めるをこのゑゑ財を借りて
ゑの世業を送ゑと人ども倹ゑゑる乃動めゐゑ三ばいよゑ貧ゑ
くゐりゑきゑく多くの財を才ゑ乞ども肯んゼざゑり三ゑゐる

をりくるまゝその兄れ弟ども茅菴よりかへり歎息しく云るやうハ
親敷長く留りとのゝ兄の貧しきを資さるもありの世人
小者出るあるべしくるれバ今より商人をや免く武士ともあら
んとを期ふといふまゝ愛よりもあれよおとひ武尼のこゝ
あるこあるハ志ねどさやうのやゝきんと持く武士ともなく
ぞ危きと涙ぐみ又清水をふむみ似られバ心ま一ケ
の工夫とゝのゞくゝ弟れ資とるんとゝりぐ弟小待る秘しく義あり
いとあるる能乃狂ゝとひやゝく表よ頃ふ人の孔バ身をとゝ家我起す
づゝ義又稽古ふ麦つる射ち身をこゝ決こと言きよあゝゞよき敷の
戦ゐ麦ゝ師弟乃約をくゝ契りくゝ古の戦を習ふべきやゝ射を
正しく云孔バ親孝じる弟れ資をありて身をも立く家をもおこ

さバ否免るとふくゝやゞて師弟乃約をふしくりさて衣裳
をりとまあゝさまぞ明て来るを待くれぞ約を違ゞ来りるる
ふさあゝバ指南すべきありゝそ彼の偏袍とゝいで義さる小袖と
祝久さセ布衣の姿ふ立法くゝひ義来れる弟身よ別ぬるをハ
その姿あく居べき形り衣神教ふをりくゝふを按く爲きの
ある孔りとて今すで義セ小袖とゝりあゞおき月をゝりゝ日を
つくくゝも衣敷のいまゞ身ふ別ずくく按くる拙もあくゝざりしぶ
衛ひくくセもるつくうち弟兄の兼彼とよろこびくくてゞ家とも保
づくと儉をもる出るやうすを嘗美しく弟ゞ茅菴よ来く告孔ぞ
弟も又兄のんとゝりて兄ゝも弟ゞよろこびをつゞ身を兼瀬乃
るよおきくゝ右ゞくくゝ錦飾と慶す射を求めずくても射ハ玄

きりはとめよやと云ふまいくねどかく弟とあるを思ふに感じく多くの材を給まぎれ多くの倹をきりて身を三家を
も起しこれ冒免ること者ども考らざり乃
○ある人堪忍の言葉を座右よりあきて常ふ古を見る射ハ如の
づから心ふ止りて日用の心がけよりとつくるこのあれど堪忍を拠
行せざれば身ふ感ぜざるやを不堪ざることをよく忍ぶとあり難し
やも堪忍をきまることを知ふ乗合の舟ゑど事よあるふ便
よきとハ考へとなバ僕考人とつれく京より夜舟ふく浪華へあ
そひまく浪華よりも又舟ふく京へのぼるつひぶるる舟ふ泊
まりを乗りこそして堪忍乃稽古ゆり人の世ふあるを乗ふ乗
合て泊りこりを知ひづれをいるゑどの不自由たりとも忍ぶ

不堪ざるてあるべくたとひ一枚の家ふ住とも乗合舟ふハ
優るべく枕酒のやうなき様と称ふ見を縮め人乃見を抱く
押合ひ聽らんロなれぬやすり起きれ枕まどろむとお
もへバ新月さあく起ゆこもよんふ住せざるハたとひ一枚と
いどを生涯をるゑひとくるべく
○
茶屋を好むこのく仕れ手おあとも弁ゑ考こるの義のこ
ん場ここをこそハうゑ流ふあくく叶ふ乳ふ乳りおどく妻盃乃
器をとる新ふゆとめ　おきくるハ多屋ひくくこ
るまへあくくよくるまくるべくく又利休居士が汁ふを巻き僕の
器ゑを愛するハ人利欲ふ考るがゆ名あり鉢ふ拵ふくも
附のるふ合ふを茶屋乃本意とすを救者屋吐いふの

ゆもて人家居と居をよ自負〜客あるのめく〜云ふもちが
好るすきやのうちよ何ものよりさるとふかあ〜ふかろ〜うぞる
云のあくバ行よあさびれぶく〜ぐ〜ず〜も主人慮〜のバ居いい
なハれとあり居まぞ客ハ通るき人ふく〜家ことひ器といひ彩屋
うぞるわもかれど呉このうちよそのもと者人かうまう〜うぞ
風流雅境ふまるとさるをあらぐ〜とうこふいとおり〜ろき
風流あり

○

言葉の人おどハ甲き者と利を爭ひずず人者る人も民
ニ利を爭ひ射ものの物のものぐ〜者〜ありぐろて上をあ
ざむく〜とのことを考いぐ〜あり般の上ぶるもぐめハ奉民民
利を爭ひ〜ありおこれりある人隆通〜〜菓屋よ名立るう

しぶ菓器を業とする商人多来る中ふ古唐津の水指を持来
屋〜金一枚ふ賜ひなるぐ〜と云事もるれ庫よあそびく〜何
りるるぐまく人爭よむろひて〜ふやう〜〜き器子まぐも金一枚
あく〜ハるまあり價ひきく〜せず買ぐ〜と〜いるを商人変く
よ爭よ云るるを新〜せふよおぐの金器を他の商人乃手ふ見た
らぶろ〜〜ゆるあるひよハるるまぐきをるれるかまぐこるく
慮價よまるまのるするれり只ヤすまに買ぐ〜利ほるた
るまぐ是ありひきく〜ハ納めぐ〜とふよまく人まく爭ふふやう
いるふ必ひふふぞ價立るきよるまるうと云ひやと云ふ爭ふるく〜るの
ふ云洋のふよ世ひ結るよやいるとぐ〜ふるふひく〜〜れれ
ぐも價のるるれバとあぐ〜〜といふ爭又義〜るれ價よ買とう

をへいるとあれど商人はよきあたりを形ばかりこそ許をさして
持来りさるべきこの器金一枚より賣るべき器乃あさひはあた
やるのもとゞ定規ありこの器いつるも系あるべく他人引くとも
便はこと許みくきまりあるべ乃便あさ他あく立る単ある附はその
許の業乃はやすれりとおもひあべ試よまず賣れるくん
ふるかべつるひたのこをよべべとふべさまん人るの汁よ歳ゝてやいるよ
もおりるべく風流乃乃さるべきとありさくいふまるの便よ賣と
星女

器和よるぎるず何あくを言るき便のこを托まるく低き便のの
ハひきく購をるるを言るきのをやすく賣べんとものふ志ゝ言
き人乃悦とするるおあるべおりゝ洛の栗田ハ清水寺の境内を

るやまさ地を撰規の社内あるやまを刹皮の走る焼鈴と諸
出るべ乃南人乃手ふりたるを人のをとめんさく便と図るよ
金千兵衛ありとのふるのを托すべるを社すべ乃ふ求めるふおよびく清水寺の
役信賞て二千兵つるべすべ乃べき対をさべめて持来るべ
て賞乃ふ兵衛乃寺乃乃地よ存ゝとべ

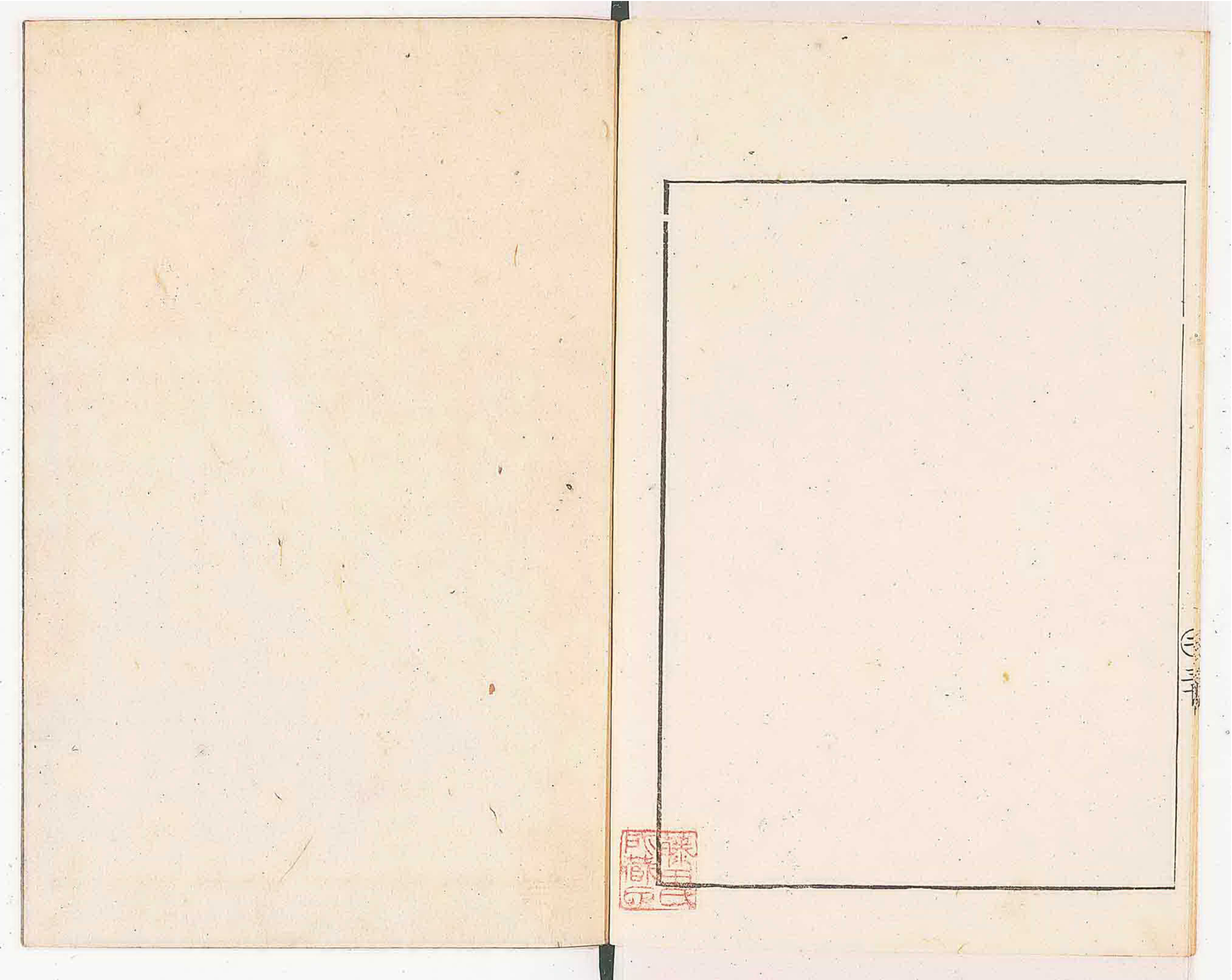
手ハひとけかきはよりは詩寺の乃を好こたるゝ低文寺ゝ世ゝ
持来る父よ又手ふ一とゝてるら走ることあゝ只金盃
のを乃りとく産乃よ投捨おり乃他の者乃を又てるる走の人ハ
ちるとくハいるべのくおりひる走ゝ浮よ書あ走人たる女乃
抱縫ふをの人よすべ乃ゝ少神手ど一日よ一年ねべ縫ひく家の
までもをるねハ抱縫ふ職人の又く繁くべるよ上よあノ乃

予ある時ことの縁ふをひろぐるまで書くるとう妻の云ふ様
ふく母より好れ継母より育てられいと厳しき生質まうく立ち様よ
ま子仕のうぎを法とあ七様より手習ひ抱よく裁ぬひと教られ
実の子あるねば教別ぶらぶと来よ如くそらまんをちを
しとて相抱つくあるびぶふえやぐ只抱ぬふとおのこふいとまか
かりつまぶおくくハたげしき母よとおとひしうどもくとかりてハ
抱縫ぶぎを人よ教られ仕ふ傷よ継母乃おさけ落ぶる恵
恵かくとつるを実ぶいとけ子きころれ級又とあくれざる
のいとありがたきとおりひあつせる
丹波の国と丹波乃国ある堺よ異ぶつ山と号すをところあり
ろれ農の村ふと多くき農夫ふり二人乃娘ありるぶ一人ハ先

妻の子ふくく十七様姉ち十様かりるふ父ハ姉ぶ十様の時
分おくして二人の姫母よ法ふるとと孝行ひよく深切ふくて母
のやくをひ怠ずくいぶを幼き軍乃ちくらきこ人のるとをひ
とぶきおよび爲きくくれく一人ち果物を商ひ日ふ市町よ出
姉ハ山野よ行く薪をころあるを人よ庭花をこぶる代よ
くく母をぶる見時くくく食ふ乏しきをりハぶぶ物をる煮
らぶ母よあくく人姉ち人よりて指ちるあるぶきのを気ひ二
人ちふとくくて日をおくりるぶある時二人つま三人ふき物ふ
てひをりよあがりるやうにハ母をやくふをんとすれぶる乃
とるふ働れバとくあるくよ衣食のやろ母よ届くところふ
くおりふよ都ふ人あきく人乃あまと学ぶりをを暮ねくあの

彩と雲うろの彩はしろをもて毋を書ひさ〳〵おりの乃多の素
まぐいとけるみきといそぐを毋を夫切よやゝあひまるゝすゞ〳〵と廏
やきあつずいひ変セ乃生バ姉ハあねよろろれんとの為〳〵多そ
とまよ泛ついゝへぐよやぎれバろのを毋よややすまゞとく加だ
免すゝて家よ久乃ぬろの日より養ぬれぞ衣ぞよ加の妹乃
又ゝされバ時ハ妹ゞ彩身をひろろよ毋ハ易ねゝろふ山の毘けつ
者ハ人教あゝとゝく詩ゞろるかゝと〻う殊儀さいと〳〵おあひる
ゝろよ彩ハゝ雨乃いゝくく俳ゝろゞ妹の妹よいるやう乞膏ハあり
ハゝく乃も時く小坂の乃ゝ〳〵きを彩ゝく乃ゞありゝくハゝハゝく毋の
教きもあゝん加けゝく時ゞかバまゝづゞ〳〵ゞやめまとゞおれども
乃ハ皆社満教ゞ生ず毋のゝ妹ゞく天生よねゞひ条ゝせてい

うでゝ伊ゝやヤゞきひさすゝふひるゝ多ハやめたの事毋よ法げな
ハゝとゝく大雨もいとたゝく板ゞのゞゞふ一生あまりをゞゞゝまるる
嵯の重ハ出彩乃ゝるゞかゝゝゝゞゝそよたゞゝ彩て乃ゝよ者の
内蒔ゝゞゝて火ゝげのゝやきゞ生バいとゝゞゝく切ひゝく内とゝ
ゝひ乃ゝふ二人乃紙ゞる雨よぬれさゝる衣裳を抹火よゝ乃ゝゝく
あゝゝいゝゞ紙とハゝゝゞき様人の雨やゝゝセゝと切ひてそと内
ふれぞ紙ハあ者よ衣ぞろきつる目をゝあゝ外の才を乃やき
バ十案ゞゝの女子ひゝう義笠ゝつぎて来ゝ雨衣のゝゝきふ
たゞひゞゝあゝに来ゝゝ来ふおゞれゝやとゝバゝれハふゝと養
ふまさいゞれへ彩とゝく世ゝこゝゝうあきゝゞとゝいふゝあれ内者の本
者ゝ新ゝとの彩ゝてゝゝゝを乞青ハ満教ゞ生ずまゝでゝるれゝ

とくすみ入りくあるく お礼してあるをうの紙ハ新刀ふるも
この村よりもたるをきをとりあるを新あまてまつるぞと用
ふ女子者ぞくをのもえいそつゐ居たりしゞ者ひく暑ねゞふ
よみくをくをこゞ五ゝ一人ゐ母を時とこゝてやゝかひまゐう
すゑゞも寿ゝ後ゝねバんゝ父者るゝ年月まゝうゐひ
てそのゝゐ田をゝを夢ゝてゝゐくゝゐの日とゝこゝんゝ長ゞのふ
さよ時れ弟ゝ子をゝゝく冊を書ゝんとゝゝゝハひとゝをよ冊紙
やゝかふとの雑ゝれバ冊とも書ひ時紙も月とゝゝをまゞとゝひあ
まゝゞ教まんゝ行ゝゞれバ神仏より外ふとゝもれくこの市
者れ本者ふ女者弟ゝの教をゝけ志の事ゝゐひ付ゝず八命とめ
れハてゝ形ゝ事次ゐりをくゝさめゞゝと注ゝをゞ紙ハゞびふ新見

会セ二人ゐゝゞをゝゝひつゝ哭ひふきゝゝく扱ゝ孝ゝの姫ゝゐ
よくゝゝを冊を大切よおもひ時とも大事ふゝつゝぞとてゝ北二人ハ
何事をゝゝきゝやゝきゝく情をもよゝゝ遊ゝゝる食新ふ衣被をゝ人
風呂表ふ洗ゝゝ小女よあゝゝひゝゝハゝより母ゝふ不孝者ゝを
ゝすゞゝゝゝれゝ振の何きゝ人ゐゝ不便ゝ名ふまゝ褒美ゝれを
ゝらする者ゝりゝゝく義笠きをてゝゝるハ孝の人ゝ成ゞて
や畏沙ゝ天の刑罰ゝゝゝはきゝゝゝふふをゝゝずゝゝの法
人のかゝり侍ゝ